

米穀先物取引と私

経済学部 教授 伊藤幹夫
いとうみきお

格言「一寸先は闇」は、ほんの少し先の未来についても不確実だと言っている。当然、人が一年先の作況や商品の相場について分からないのは、現代も江戸時代も変わらない。

不確実性に起因する取引上の得失のバラつき(リスク)を減らしたいという人々の願いを、先物取引で実現したのは大阪の米商人たちであった。1730年に公許された堂島米会所^{どうじまこめかいしよ}では、相対での米穀の延取引(事前取引)にとどまらず、不特定多数の人間の間で米切手とよばれる米の保管証書の取引が行われた。受け渡し期限の長期化と額面の小口化、さらには証拠金を積んでの差金決済が可能になったことで、米穀現物の決済が簡略化されたにとどまらず、不特定多数の取引者の間でリスクの分散と軽減が実現された。江戸時代の堂島米会所が、現存するさまざまな先物市場の特質を、世界に先駆けてほぼすべて持っていたことは、国際的にもよく知られている。米穀の先物取引は、幕府さらには明治政府が、先物市場のリスク分散機能への無理解から賭博と同一視したため、歴史的に何度か存続が危ぶまれた。それでも今日に至るまで、取引所の名称の変更、市場の開所・廃止を伴いながら継続し、リスク分散機能を果たしている。

この数年間は、共同研究者(野田顕彦・前田廉孝の両氏)と、明治中期以降日中戦争期まで、大阪堂島と東京日本橋にあった米穀先物の二大取引所が覇を競った期間を対象に、金融計量分析に基づいて研究してきた。具体的には、二大取引所の関連、政府の介入や電気通信の普及の取引所への影響に関して、米穀先物市場の市場効率性が時々刻々変化するという視点で分析した結果を、数編の英語論文にまとめてきた。幸い、それらをEconomic History ReviewやFinancial History Reviewといった国際ジャーナルに公開することができた。この僥倖は、現代に至るまで米穀先物の取引価格・取引高・行政資料が可能な限り記録・保管されたことに多くを負う。実際、堂島米会所に百年超遅れるシカゴ商品取引所に関して、比肩しうる史料は非常に限られる。



大阪堂島米穀取引所の立会『大阪写真帖』(大正3年刊)より

談話室

教員によるエッセイコーナー